高みを目指して　リーネ編

ユキアン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
高みを目指して　リーネ編

【Ｎコード】
Ｎ６６６５Ｓ

【作者名】
ユキアン

【あらすじ】
５００年以上昔、レイト・Ｍ・テンリュウとエヴァンジェリン・Ｍ・テンリュウは多くの愛すべき人を残してこの世界から高みへ行ってしまった。彼女らは再び出会う為に彼らが居ると思われる高みを目指して、各々の根源を探す旅に出る。

ちなみに「迷子の果てに何を見る」の番外ではなく続編です。まだ本編終わってませんけど実は構想は既に出来上がっているので空気になってしまっているリーネ達を活躍させようと思い投稿する事が

決定しました。かなりの亀更新です。

輪廻の輪へ（前書き）

調子に乗ってやってしまいました。
かなり突発的に思いついてしまったためストックゼロで突き進みます。

輪廻の輪へ

ｓｉｄｅ　リーネ

積もっていた埃を全て取り払い、時間の概念を弄り部屋を保存する。ここに戻ってくるのかどうかは分からないけどここには思い出が詰まっているから残しておこうと思う。

「リーネ、こっちの保存は終わったぞ」

「こっちも終わったわチウちゃん」

「じゃあ」

「ええ、行きましょう」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　ｏｔｈｅｒ

日本の関東に存在する極東最大の霊地、麻帆良と呼ばれていた場所

にある神木・蟠桃。その上空に7人の男女が浮かんでいた。

「さて、みんな集まった事だけどお別れと覚悟は済ませてきてる？今ならまだ思い留まれるけどだけど」

リーネがみんなに確認を取る。

「大丈夫に決まってんだろう。この５００年近く、ずっと修行ばかりであんまり他人と交流を深めたりする事はできなかったんだから」

「それもそうだったわね」

リーネが眼下を見下ろす。

そこには鬱蒼と生い茂る森が広がっている。

ここにはかつて学園都市があった。そしてここに居る全員が通った事がある思い出の場所でもあった。

「懐かしいと思わない。昔の面影はもう残っても居ないのに今でも昨日の様に思い出せるわ」

「そうですね、姉上。あの頃は楽しくもあり、最後の一年は胃が痛かったのも今では良い思い出ですよ」

「ああ、ネギ君の事か。リーネちゃんとチウちゃんは一番大変そうやったな」

「全く持って惜しい存在だった。原作の彼と違ってあまり見所が無かったね」

「もうちょい頑張って欲しかったけど自殺したんやったっけ？オコ

ジョの姿で」
「ちょっとだけ違う。オコジョ刑になる前日に自殺したんだよ。まあ、所詮それまでの人間だったんだよ」

それからみんなで色々と昔話を興じていると蟠桃が光りだした。
「いよいよね。零樹、刹那術式展開」
「「はい」」
リーネと霊樹と刹那の足下に魔法陣が展開される。
リーネの陣の中に千雨が、
零樹の陣の中にフェイトと小太郎が、
刹那の陣の中に木乃香が入る。
「じゃあ、みんなまた会いましょうね」
「じゃあな、先にレイトさんの所で待ってるぜ」
「姉さん達、お元気で。また会いましょう」
「元気でね。それと向こう側に辿り着いたら連絡用の術式に書き込むのを忘れない様に」

「姉ちゃん達、元気でな～」

「それではまた会いましょう」

「絶対に死んだらあかんで～、卑怯者呼ばわりされようが絶対に生き残るんやで～」

そして全員揃って同じ台詞を告げる。

『運命の交差路でまた会おう』

５００年以上昔、レイト・Ｍ・テンリュウとエヴァンジェリン・Ｍ・テンリュウが残していった言葉を告げ、この世界から3組に分かれて旅立っていった。彼らが居ると思われる高みを目指して、各々の根源を探す旅に。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　リーネ

光が治まり周囲を見渡す。そこは何処かの学校のようだった。

「学校ねぇ、どんな世界だと思う」

「微妙に見覚えがあるけど、ごめん。分かった。そこの自販機で」

チウちゃんが指差した自販機を見る。自販機自体は普通の自販機だった。問題は商品サンプル。

「Ｋｅｙコーヒー、つまりここは」

銃声が外から聞こえてくる。それも１０人程度が一斉に打ち続けているようだ。

「エンジェルビーツ、輪廻の輪の途中にある世界」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ファーストコンタクト

ｓｉｄｅ　リーネ

「エンジェルビーツか、どうしよっかチウちゃん」

「どうするもこうするもエンジェルビーツって確か青春をやり直す為の世界だったはずで私たちは別に死んでないのにこの世界に来てしまった。問題はここが時間的にいつなのかの方が問題だと思う。天使の役をやっているのが立華奏なのかそれとは違う奴なのか。もし立華奏ならゆりはどれだけのメンバーを集めているのか。私たちがどうするのかは……気分で良いんじゃないか」

それもそうよね。とりあえず音源の近くの影から周りを見てと。えっと、天使は奏でゆりがリーダー、音無君はいないわね。ついでに寮の方も見てみようかしら。

「影から見たけど、たぶん音無君が来るちょっと前位だと思う。寮っぽい所にはガルデモも居るし間違いないかな」

「そっか、それより気になるんだが銃声が近づいて来てないか」

そういえばどんどんこっちの方に近づいて、もしかして撤退中ですか。

「とりあえず物陰に……無いから屋上で様子を見ましょう」

直ぐさま屋上まで飛び上がり様子を伺う事にした。
まあ、撤退中みたいで牽制程度にしか弾を撃っていないので弾幕がよく切れてその度に距離を詰められているのがよく分かる。

「危なげないわね」

「そりゃあ素人の集まりだからな。後2回ほど弾幕が切れたら追い付かれるな」

「ブライトさんが文句言わない位に撃たないと」

「リーネが弾幕張ったら逆に濃過ぎて文句言われそうだな」

「否定はしないよ」

だって私の戦闘スタイルってお母様の莫大な魔力とお父様の緻密な魔力運用を用いた弾幕戦だもの。奇襲も得意だけど。

「それより援護しなくていいのか」

「別に死んでも問題ないじゃない」

「そうだけっ、危ない」

チウちゃんに引っ張られて屋上から飛び降りるとそこに戦線メンバーの誰かが持っていたロケットランチャーが私たちが居た場所に直撃していた。どうやったら正面に居る天使に対して屋上に居る私たちの所にロケットランチャーが飛んでくるのよ。
屋上から飛び降りてきた私たち2人に注目が集まる。無論、天使である奏ちゃんの視線もだ。

「散開」

私の合図でチウちゃんと私は別方向に逃げていく。こういう場合は迅速な行動が勝敗を分つと教え込まれたから行動は速かった。
私は校舎に、チウちゃんは体育館に向かって走り出した。勿論、気や魔力による強化は無しで普通の一般人としての力量で走り出した。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　ゆり

あの２人、一体何者？
屋上から飛び降りてきたと思ったら直ぐにここから走り出した。
私たちを観察していた？　何の為に。
天使の仲間？　それならここから離れる必要は無い。
そもそも屋上から飛び降りてきて無事なのはどういう事？　イレギュラーなの？
考えるのは後にしましょう。とりあえず今は。

「みんな、走りなさい」

ここから離れる事だけ考えましょう。

side out

方針

ｓｉｄｅ　リーネ

チウちゃんと別れてから少し経つと銃撃音が完全になくなった。つまり、ゆり達は完全に逃げ切ったということでしょうね。

「で、私に何か用かしら？」

廊下の角から帽子を被った男子生徒が現れる。

「生徒副会長の直井です。あなたは？」

「リーネ・マクダウェル・テンリュウよ。ストーカーの直井君」

「ストーカーとは酷いですね。まあ、直ぐに関係なくなりますが、『僕の言う事を聞け』」

直井とか言う男子の目が紅く光りだす。確か催眠術だっけ？
うん、全然聞かないや。所詮は素人。催眠術で思い通りにやってきたんだろうけど時間と手間はかかるけど催眠術以上の人身掌握術をその身に教えてあげるわ。調教という名の人身掌握術をね。

「変態ね、初対面の女の子に向かって言う事を聞けだなんて。一体どんな妄想をしてるのやら。私が綺麗だから自分の思い通りに出来たらさぞかし気分が良いんでしょうけど、私はそんなに安くはないのよ」

「バカな、僕の催眠術が聞いていないだと」

「催眠術？なるほどね、それで今までも色んな女の子にちょっかいをだしていたのね。これは許せる事じゃないわね」

私は影の中から鞭を取り出す。

「たっぷりと調教してあげる」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　千雨

リーネと別れてから早一週間、私は一人で行動している。あの後すぐに天使、立華奏に追い付かれ、とりあえず話し合いでなんとか決着を付けて色々とこの学園での生活の仕方を教えてもらった。何から何までお世話になったので何か困った事があった時に手伝うと言って別れたのだがまさかこんな事になるとは。

「一週間前から副会長が行方不明で仕事が滞っているからそれを手伝って欲しいと」

「そう」

嫌な予感がする。リーネにこの世界では好きに生きようと言ってしまった。たぶん直井はリーネが何かしたのだろう。どうなったかは知らないが無事ではあると思う。
死ねないし。

（やっほ～、チウちゃん元気にしてる？）

突如リーネから念話が届く。

（リーネ、今どこに居るんだ）

（ちょっとね、後一週間位はそっちに戻れそうにないわ）

（分かったよ。ところで直井が行方不明になっているんだが何かしたか）

（……何もしてないよ）

（嘘だな）

（本当だよ、私は直井なんて知らない。従順な犬なら知っているけど）

（……おい、こら。いきなり何やってんだよ）

（調教）

（……どこから突っ込んでいいのか）

（チウちゃんが好きにしろって言ったからこうなっちゃったのよ。まあ実際の所は直井がいきなり私に催眠術なんてかけようとしたのが原因だから自業自得ね。チウちゃんも一緒に調教に参加する？）

（いや、別に良いよ）

（そう言うと思って既にチウちゃんの言う事も聞く様にしてるんだよね）

頭痛が痛い。リーネはこの世界で一体何をするつもりなんだ。直接聞いた方が良いな。

（リーネ、お前はこの世界で何をするつもりなんだ）

（う～ん、そうねピエロを追いかけるクラウンを見て笑う脚本家兼観客かな？）

ピエロとクラウンがどっちなのかは分からないがリーネの言う通りなら直接何かをするという事はないのだろう。おそらく直井を代理に劇を引っ掻き回すつもりなのだろう。そしてアドリブを期待している。

（チウちゃんの活躍に期待しても良いかな）

（ああ、見ていろ。おもしろおかしく動いてやるさ。リーネの脚本をめちゃくちゃにして）

（期待してるわ。ただ一つだけルールを設けましょう）

（内容にもよる）

（他の役者に台本の中身を教えずに動く。ただそれだけよ）

（つまり原作の内容を教えなけりゃ良いんだろ）

（そう。私は出来るだけ原作通りの行動を起こさせるわ。そして私が直接動く事は滅多にないわ。そうね、たぶん2回だけねちょっかいをかけるのわ）

こう宣言するってことは裏ではちょくちょく動くって事だな。いやもしかしたら全てで動くのかもしれない。

（で、いつ頃こっちに合流するんだ）

（直井のクーデターの後にある程度の種明かしやらをやって第2幕の開演をやろうかと）

（その時はリーネの傍に着くぞ）

（さびしいの？それなら一緒に寝る？）

（私の身の安全の為だ。さすがにあいつらに捕まるとどうなるか分からないからな）

（変身すれば良いじゃない。プリズムチウちゃんになれば）

（さすがにこの歳であの格好と台詞を言うのは）

（テンションが上がってくるんでしょう）

（そうそう、って違ぇえええ）

（振りですね。分かります。というわけでルビー、チャンスがあれば強制的に変身しちゃいなさい。私の方から許可を出しておきます）

（ありがとうございます。いやぁ～、最近チウちゃん私の事を使ってくれなくて懐かしいアニメを見る位しか無くて退屈だったんですよ）

（ピンチの時だけ変身しなさい。それ以外では駄目よ）

（あいあいさ～。久しぶりに写真撮影もしますよ～）

（後でサファイアにも回しなさい）

（分かってますよ）

（本人に聞こえる様に話してんじゃねぇえええ）

（（きゃあああああ、鬼が出たから逃げろ～～））

（お前も鬼だろうが）

念話を切られた後肩で息を吐く。

「どうかしたの千雨？」

「何でもねえよ。とりあえず何をすれば良いんだ」

とりあえず舞台に上がる為に彼女の傍にいるとしよう。

黒歴史

ｓｉｄｅ　ゆり

前回の作戦から一週間経った今日になってもあの時に見かけた２人の情報が殆ど集まっていない。眼鏡を掛けていた方、長谷川と名乗った彼女とは接触できたがもう１人の金髪の彼女には全く出会う事が出来なかった。長谷川さんも探しているみたいだけど会えていないみたいね。

「おい、ゆりっぺ。なんか変な噂をＮＰＣからきいたんだけど」

「変な噂？しかもＮＰＣから」

今までそんな事はなかったはず。彼女達が来てから確実に何かが変化している。

「なんでも生徒副会長が行方不明になっているらしい」

生徒副会長が行方不明？どういうことかしら。

「その噂、少し調べてきて。できれば生徒副会長の居場所も。それからみんなに武器を出来るだけ景仰して死なない様にも通達して」

「おい急にどうしたんだよ」

「この世界の何かが変わりだしたかもしれないわ。不測の事態に備

える必要があるわ」
あとでギルドに武器の発注も頼まなくちゃ。
「それからまだ彼女は見つからないの」
「そっちの方はまだだ」
「出来るだけ急がせて」
「もしかしてそいつが」
「新しい天使かもしれないし、あるいは」

神

side out

ｓｉｄｅ　千雨

「ほい、こっちに判子とサイン。一応こっちの書類にも目を通しといてくれ」

「分かった。それにしても千雨」

「なんだ」

「千雨ってこういう事に慣れてるの？」

「慣れてるっていうか慣れさせられたというか。リーネ、最初に私と会った時に隣に金髪の娘がいただろ。あいつとは親友なんだけどめんどくさい事を私にやらせてくるから書類仕事なんかに慣れちまってな。後は堂々巡りでずっとやってきちまったからな」

思い出すだけで悲しくなる。バイトの私に決算を任せるとか何考えてるんだよ。というより零樹以外は書類仕事が出来なかったな。

「千雨、苦労したんだね」

感情に乏しい奏に慰められる位今の私は酷いのだろうか。

「まあ、おかげで書類仕事が得意になったから別に良いけどな」

おかげで一週間滞っていた業務が数時間で済んでしまった。

「はい、これでラスト」

「うん、ありがとう」

こうして私の副会長代理の初日が終わった。

それから3日程経った夕食時それは起こった。
食堂で激辛麻婆（ご飯を入れて麻婆丼）を食べていると銃声が聞こえてきた。ゆり達が奏と交戦を始めたのだろう。それにしても銃撃音がもの凄く多い様な気がす

「動かないで」

いつの間にかゆりとモブの戦線メンバーに銃を突きつけられていた。
とりあえず無視して麻婆丼を食べようとするとゆりに皿を吹き飛ばされた。

「動かないでと言ったでしょ。次は頭を吹き飛ばすわよ」

このとき私の頭の中は笑っているレイトさんが殺っちゃえと言って

武器を構えている光景が映っていた。

（……ルビー）

（はいはい、変身ですね）

（そうだ、重火力でこの場を殲滅するぞ）

（ならいきなり多元転身（プリズムトランス）もしちゃいましょう）

（行くぞ、変身）

（多元転身（プリズムトランス））

急に私が光に包まれた事でゆり達が一歩引く。光が収まるとそこには蒼を主体としたいかにも魔法少女的なドレスを着て、背中に４対の機械の羽が有り、両腕にガトリングを持ち、周囲にはビットが浮かんでいるプリズムチウちゃん・ＭＳモードになっていた。

「飯の恨みを思い知れ」

言うと同時に両手のガトリングとビットがビームを吐き出す。狙いは付けずに適当に周囲を殲滅するだけだ。実弾だと重さで扱い難くなるのでビームガトリングだ。まあ正確に言えば『魔法の射手・炎の矢』を極限まで威力を上げて打ち出しているだけなんだけどな。反撃の隙も与えずに３０秒程周囲を殲滅した結果食堂に生きている者自分以外にいなくなった。

「しまった、ＮＰＣのおばちゃんだけ残しとけば良かった」

軽い後悔とともに変身を解き、死んでいる戦線メンバーからドロップアイテムを漁る。

「魔法少女が死体漁りなんてシュールですね」

「紅い英雄も言ってたろ、くだらないプライド等そこらの犬にでも喰わせておけって。おっ、ハンバーグ定食の食券見っけ」

「マスター、ゆりさんの近くにも食券が落ちてますよ」

「本当だ」

よく見ると激辛麻婆の食券だったので奏にでもあげようと思い近づくとゆりがハンドガンをこちらに向け頭目掛けて撃ってきたのでルビーを盾にする。

「あだっ、いたっ、ちょっと、まっ、いだ」

「ちっ、仕留め損なってたか」

「冷静に分析してないで私を盾にするのをやめて」

「いやだ。当たったら痛いじゃないか」

とか話しているうちに弾も気力も尽きたのかゆりが倒れた。

「さて、帰って寝るか」

「そうですね」

私はぼろぼろになった食堂を後にした。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　戦線メンバー

「急げ、天使が来る前に全員を運ぶんだ」

ゆりからの連絡が途絶えて食堂まで来てみるとそこは地獄だった。壁のあちこちに穴が空き、無事なものが一つも無い。

「チッ、酷い状況だな」

「チャーさん」

ツナギを着たおおよそ学生に見えないギルドの長をしているチャーさんとギルドにいる仲間がいた。普段からギルドに籠っているこの人がいる理由が分からなかった。

「ゆりが復帰するまでの指揮と調査を担当する事になった。とりあえず戦線メンバーは死亡者を全員運び出せ、ギルドの者は武器の回収と敵の武器の正体を探れ。建物の修復まで時間がない、急げ」

『『はい』』

チャーさんの指示でオレたちは行動を再開する。散らばった腕や足を回収して荷車に乗せていく。死体に慣れてない奴が戻したりしているがそれに構っている余裕はない。天使に追い付かれたらオレらもリアカーの奴らと同じ運命だからな。

「おい、まだ撤退作業は終わらねえのか。もう保たねえぞ」

「もう少し時間が掛かる。これでも使ってなんとかしろ」

チャーさんがいつの間にかロケットランチャーや手榴弾といった爆発物を大量に押し付けていた。

「武器と調査は諦めるぞ。総員ギルドまで退避しろ」

死亡者を乗せた荷車を押して学園の敷地内にある河原まで押していく。ここには普段使うギルドの入り口以外にフィッシュ斉藤が釣りの為だけに作った秘密の通路があり今回はここを使わせてもらった。本人は釣り以外の事に使いたくなかったそうだがこの世界が根本的に変わりだしたかもしれないというゆりの意見を聞き最後には折れてくれた。今頃は新しい通路を造っているらしい。まあそれはともかく早く逃げよう。

side out

side　千雨

シャワーを浴びてパジャマに着替えて今日はもう寝ようと考えているとベットにおいていた携帯が鳴りだした。戦線メンバーが銃火器を土から作っているのは覚えていたので錬金術っぽい事をしたら作れたのでそれを魔術的に改造して通話が出来る様にした携帯を奏に渡しておいたのだ。ついでに絶対に壊れない様にも改造してある。戦線メンバーとの戦闘で壊されたくないし。おっと、とりあえず出ないと。

「もしもし」

『千雨、ごめんだけど私の部屋から代えの服を食堂まで持って来てくれない』

「どうかしたのか？」

替えの服？どういうことだ。

『ちょっと服がぼろぼろになっちゃったの』

ぼろぼろになったってまさか私の流れ弾に当たったのか。

「分かったすぐに行く」

というより私に代えの服を持って来てもらいたい位にぼろぼろな状況ってことはかなり酷いんじゃないか？
携帯を切り奏の部屋から制服を取り出し、窓を開けて瞬動で食堂まで向かう。

「お～い奏、どこだ～」

「千雨、こっち」

声がした方を見ると物陰に隠れていた奏がいた。

「大丈夫か」

「うん」

大丈夫だと答えるが服の方は酷い。どれ位酷いかというと、ぶっちゃけほぼ全裸。

「一体どんな事されたんだ」

「最初は銃で撃たれてただけなんだけど最後に爆弾をいっぱい投げられて」

そういえば原作の2話でもポテトマッシャーに対して足を止めて防御しかなかったし、いくらかダメージが入ってたからな。たぶんアップルとか以外にもＲＰＧが混じってたんだろうな。

「とりあえず着替えろ。私は誰か見てないか見回るから」

「ありがとう」

奏から離れて食堂に入る。私が壊した物は全て直っている。そして私は厨房に向かい

「「動くな」」

チャーさんは銃を私の額に、私はチャーさんの目にコンパスを突きつけ合った。

「はじめまして。あんた達はいきなり武器を突きつけるのが挨拶なのか」

「そういうあんたは周囲を破壊し尽くすのが挨拶なのか」

「あれはゆりたちが私の食事を邪魔した酬いですよ。私の師匠に食べ物を粗末にする奴は殲滅しろと教え込まれているのでね。先に言っておきますけど、私は自衛しかするつもりはないので銃を降ろしてもらえますか」

「その前に一つ答えろ」

「内容にもよります」

「ゆり達を殺ったのはレーザーか」

「似た様なものです。この世界では生前の記憶を元に土塊などを材料に様々な物を作れる。逆に言えば理論さえ存在するなら不可能を可能にする事が出来る。ただそれだけですよ」

嘘です。魔法を使いました。とは言えないし、まあたぶん出来ると

思うから良いだろう。

「そうか」

そう言ってチャーさんが銃を降ろす。私もコンパスを降ろす。

「聞きたいのはそれだけですか。今の私は機嫌が悪いのでとっとと帰りたいんですけど」

「……お前達はこの世界の何を知っている」

「全て……とまでは言いませんけど私とリーネ、ゆりが探している金髪の少女は大概は知っていますよ。教えるつもりはありませんけど。まあ、ヒント位なら教えますよ。あなた達の共通点と消えていった生徒の意味が分かればこの世界の場所と必要性が見えて来ます」

それだけを言って奏がいる場所に引き返そうとする。

「待て」

「まだ何か」

「オレの名はチャーだ」

「長谷川千雨。ちゃんと名乗ってくれた律儀なチャーさんに一つだけアドバイス。神って奴は誰にでも平等です。覚えておくと良い」

呼び止められるのは予想外だったが、まあ別に良いだろう。

奏の所に戻ると着替え終わっていたみたいなので二人で寮に戻った。

そして、部屋に戻ってから気付いた。

私、パジャマのままだった。

うぉぉぉぉおおおおおおおおお、私パジャマのままであの台詞を真面目な顔で言ったのかよ。やばい、これは黒歴史として封印しよう。忘れよう。

side out

原作開始

ｓｉｄｅ　リーネ

「それじゃあ私の為にしっかりと働くのよ」

「はい、リーネ様」

調教は完璧ね。一目見た時から彼には適性があると睨んでいたけれど、ここまで従順な犬になるとは思わなかったわ。確か彼は『誰かに認められたい』と思っていたはずね。私に認められる事に喜びを感じる様になったのね。中々かわいい所があるじゃない。

「さあ、私を楽しませてね。チウちゃん」

さて見学する為にＮＰＣの物真似でもしようかしら。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　チウ

「暇だ〜〜」

授業なんて何時ぶりだっけ？大学には行ってたから５８０年位前か、ずいぶん年を取ったものだな〜。まあ、そんな事だから今更勉強する事なんてないから暇で仕方ない。それと戦線メンバーがこっちをちらちら見てくるのもうざい。なんか楽しい事って無かったっけ？授業が終わり屋上でコーヒーを飲みながらのんびりしていると天啓が降りてきた。

「そうだ、拠点を作ろう」

『別荘』とまではいかなくてもある程度の設備を揃えた工房があれば将来楽になる。特に直井のクーデターの時なんか拠点があれば面倒な事をしなくてすむ可能性が高くなる。

思い立ったが吉日という事で早速体育館から地下に潜る。

なんで地下かって？

ここなら戦線メンバーが作るだけ作って放置している倉庫みたいな部屋があると思ったからだ。ついでに探険みたいで面白そうだったからな。実際数々のトラップが私を待ち受けていたが作動させる事無くどんどん地下へと突き進んでいった。そして、倉庫らしき場所を見つけたのだが

「釣り道具が大量に、ということはここはフィッシュ斉藤の部屋か」

「誰だ！！」

大量の釣り道具に気を取られて部屋の奥で道具の手入れをしていたフィッシュ斉藤に気がつかなかった。

「お前は」

仲間を呼ばれる前に殺るか。ポケットからカッターナイフを取り出し投擲しようとしたその時

「見た事無い奴だな。来たばかりなのか？」

「へっ？」

勘違いしたのか最初から戦線メンバーの活動に興味が無いので私の事を知らないのか。たぶん後者だろうな。しかしこれは好都合だ。

「よく分からないんだがここってどこ？」

「オレたちはここを学園と呼んでいる。そしてここはその学園の地下にあるオレの部屋だ」

そこから自分が知っている事を色々と話してくれた。基本はアニメで語られている事と同じだったが物の作り方を教えてもらえたのは為になった。

「ところでなんで釣り道具がこんなに？」

「オレが釣りが好きだからだ」

そんなそこに山があるからみたいに言われても、まあそれが斉藤という存在なのだろう。それから少し話して何故か気に入られ秘密の通路を教えた貰ったり、ここと似た様な部屋を一つ貰った。これはラッキーだ。早速結界を張ってルビーの倉庫から工房に必要な道具を取り出し配置する。

「これで準備はできたな。さて、斉藤に付き合って釣りにでも行くか」

中々有意義な時間だったな。水は綺麗だったし、そこそこの種類の魚もいたし、適当に塩を作ってまぶして焼けば旨いし、ついつい夜遅くまで釣りを楽しんでしまった。

「いやぁ～中々楽しい人でしたね」

「そりゃあ斉藤だからだろ。中の人の補正が入っているかもしれないが」

「そういえばＫｅｙに出てくる緑川さんはそんなキャラばかりでしたよね」

「そうだな、でもなんだかんだでかっこいいんだよな」

「そうですよね、おやぁ？もしかしたら今日から原作開始かも知れませんよ」

「えっ、まじで」

「はい、先程一人音無さんが現れると思われる位置に急に人が現れ

ましたから」

「なら空から様子見だけするか」

「変身ですか？」

「嫌だ。普通に戦闘服で良いだろう」

対弾、対刃の黒いコートを羽織り、同じ素材のズボンを履き、スカートを脱いで、狐のお面を被り、最後に髪の色を魔法で白くする。

「なんで私の周りにいる人たちは普段はセンスの良い服を着たりするのに戦闘服になると黒で統一しちゃうんでしょう。私としてはもっと派手でフリフリな服で戦ってもらう方が華があっていいのに」

「師匠のせいだな。遊びならともかく戦闘では機能を優先する様に教え込まれちまったからな」

「はぁ～、全くあの人と来たら自分は仮面ライダーで戦う事が多いのに弟子には全く逆の教えをして」

「いや、師匠の場合、手加減する為に仮面ライダーになりきってたんだろう。実際本気の戦闘力を見た時はセルゲームの観戦をしていたサタンの気分だったし」

「『ふはははは、どうだ、今ここに銀河系を吹き飛ばせる程の気が溜って来たぞ』とか言ってましたっけ」

「その後に『まあ冗談だけど』とか言って格闘でぼこぼこにしてたよな」

「実際、気じゃなくて魔力は溜ってたんですけどね。銀河系が滅びる位」

「アレには吃驚したけど結局どうなったんだ？」

「自分がいなくなっても崩壊しない様に全部魔法世界に送ったみたいですよ」

「全部考えてたんだよな」

「全く凄い人ですよ」

思い出に浸りながらも空に浮かび様子を眺めている。ちょうど音無が奏に刺されている所だった。

「心臓を一差し、あれ？音無って心臓が無いんだよな確か」

「ｗｉｋｉにはそう書いてありますね」

「どうやって生きてるんだろう。一度解剖してみるか」

「面白そうですね、ではこのあと拉致って工房に連れ込みましょう」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

ｓｉｄｅ　音無

「うっ、ここは」

目を覚ますとそこは真っ暗な闇の中だった。ぼんやりする頭で何があったのかを思い出す。確かオレは心臓を。慌てて確認しようと腕を動かーーーない。

「なんだ、どうゆう事だ」

「気がついたかね」

急に明かりが着けられ目を瞑る。少しすると目が慣れてきたので周りを見る。

まずは自分、手術台の様な物に寝かされ両手足を固定されている。視界の上の方を見ると白衣を着て狐の面を被っている白髪の女がこちらを見ていた。

「オレをどうするつもりだ」

「君は今から私に改造され無敵の超人となるのだ」

女が指の鳴らすとどこからともなくお約束の様なドリル等が出て来て、独特の稼働音を響かせる。そしてそれがどんどん近づいてくる。

「ひっ」

逃げようと必死に身体を動かそうとするもがっちりと固定されてい

る。

「や、やめろ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜」

「いいぞ」

「へっ？」

すぐにドリルが止まり手足の拘束も解かれる。

「君が寝ている間に私がやりたい事は終わっているからね。心配しなくても身体を少し調べさせてもらっただけだ」

「身体を調べた？何故」

「残念だがその質問には答えられない。まあ、君は他の人とは若干だが違う部分があるとだけ言っておこう。無論、この世界での活動に支障をきたす事は無い」

「この世界、じゃあここはやっぱり」

「死後の世界だと彼女達は呼んでいるようだな。まあ強ち間違いではない」

「お前はこの世界の事を知っているのか」

「残念だがその質問にも答える事は出来ない。だが、その質問の答えは探せば見つける事が出来る。最もこの世界に来たばかりの状態でなければ苦労はするだろう」

「何故なんだ」

「人に聞くばかりでなく少しは自分で考えたまえ。私は考えを止めない人が好きなのでね。常に考えを止めなければ自ずと答えは出てくる。さて、そろそろお別れの時間だ」

女がそう言うと急に意識が薄れだしてくる。

「ま……て、……なま……え」

「玉藻、とでも呼べば良い」

そこでオレの意識は完全に落ちた。次に目が覚めるとそこは保健室だった。

「……あれは夢だったのか？」

だが夢にしては妙にリアルだった。

身体を調べてみるが特にこれと言っておかしな部分はない。玉藻とか言う女はオレが他の人とは少し違うと言っていたがどこが違うのかが分からない。

くそっ、一体なんなんだ？

side out

お知らせ

誠に勝手だとは思いますがこの作品を書き直そうと思います。
具体的には

バラバラにならずに全員で異世界を旅する
メンバーのうち小太郎、千雨、木乃香を除外
代わりに茶々丸を含めたシスターズ、ブラザーズを追加
ただし、基本はダイオラマ魔法球から出てこない
茶々丸はちょくちょく出て来る
移動する世界は勝手気ままに
到着時期は原作開始の1年から数週間前

以上です。

修正版のタイトルは

『高みを目指して』

です。
一応この作品も凍結という形で残してはおきます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6665s/

高みを目指して　リーネ編

2011年7月26日00時48分発行